

「イーサン・ブランド」

——〈許されざる罪〉の本質——

高 島 清

副題、「書き上げられることのないロマンスから的一章」(傍点筆者)が示す通りに、「イーサン・ブランド」の主人公イーサン・ブランドの18年間の旅の内容は、具体的に描写されていない。しかし読者は、旅から帰って来たブランドの言動から、18年間でどのように過されたかを推測することは出来る。彼は、「エゴティズム、すなわち胸中の蛇」の主人公ロデリック・エリントン同様に、他人の心の中を探ることに全てをかけていたのである。

「イーサン・ブランド」の本筋そのものは簡単である。18年間に亘る「許されざる罪」を探し求めての旅から帰ったブランドは、その探し求めていたものが他人の心の中にあるのではなく、実は自分の心の中にあったことを知り、自嘲と孤独の中で、石灰窯の中に身を投じるのである。本筋は以上のごとく極めて簡単なものであるが、ブランドが石灰窯に身を投じるまでの間の人間関係は相当に複雑多様である。

石灰製造職人のバートラムおよびその幼い息子ジョウとブランドの関係は、ブランドの笑い声によって始まる。その彼の笑い声は異様である。それは「陽気さにあふれたものではなく、まるで森の木々の枝を揺がす風のように、ゆるやかで、重々しいとさえいえる大きな笑い」(XI, 83)である。この笑い声に対するバートラムとジョウの反応は全く異なる。この反応の違いはそのまま二人の人間——一方は大人であり他方は幼い子供ではあるが——の違いでもある。バートラムは笑い声を「酔っ払い」、「村の酒場から帰って来る陽気な男」(XI, 83)のものだと考える。しかし、その同じ笑い声はジョウを「ぞっとさせる」(XI, 83)のである。「酔っ払い」の笑い声と解釈したバートラムは「粗野で鈍重な顔付きの」「感受性に乏しい中年の武骨者」(XI, 83)であり、ジョウはその父よりも「感受性の鋭い」(XI, 83)人間である。生れ故郷の村に帰ったブランドはまずこうした対照的な2人に接触する。その次に接触する人間は、父のバートラムの言いつけにしたがってジョウが呼びに行った「村の酒場にたむろする怠け者達」(XI, 90)である。彼等の中で特別な存在として描かれているのが3人で、1人はアルコールとパイプ煙草の煙の臭いを体中にしみ込ませた「駈馬車周施人」であり、2人目は、かつては腕利きの弁護士であったが今は、アルコール漬けのため「零細な石鹼製造業者」(XI, 90)にまで落ちぶれたジャイルである。彼は斧で片足の一部を切り落とし、蒸気機関にはさまれて片方の手首をすっかりもぎ取られ「人間の断片」(XI, 91)となってしまった男である。3人目の人物は村の医者で、彼もまたブランディーのため「野獣のように気が荒く凶暴で、地獄に落ちた人間のように悲惨な状態」(XI, 92)になったパイプを口から離したことのない男である。これらの男達とのやり取りの中で、ブランドは、ハンフリイという、ブランドが「心理学の実験の被験者」にし「その魂を破滅させた」エステルの父親に会う。しかし、娘エステルに関する情報を求めるハンフリイをブランドは無視する。次に

ブランドが接するのは、彼を見たいという好奇心にかられてやって来た「多数の村の若い連中」(XI, 94)である。しかし彼等はブランドにさして特別なものが認められないとなると、すぐに興味を失ってしまう。ブランドが最後に会う人間は、ドイツ系ユダヤ人である旅廻りの、のぞきからくりの興行師である。のぞきからくりの箱を覗いた後、ブランドはこの男に会ったことを思い出す。すなわちブランドはこのユダヤ人と旧知の関係にある。

それでは、こうした人物達は、ブランドに対してどのような反応を示すのであろうか。

バートラムは、その顔付きからも察せられるように、「仕事に必要とされるごくわずかのものを別にすればまったく考え事にわずらわされることがなかった」(XI, 85)人物である。しかし、ただ一人ブランドを目の前にし、ブランドの自嘲の笑い声を聞く時、鈍感なバートラムも「神経が震えるのを感じ」(XI, 85)、息子を村の酒場にたむろする連中のもとに送り出したことを後悔する。そして、「神も慈悲を施すことが出来ない唯一の罪」(XI, 88)を犯したと告白するブランドと向き合った時、彼「自身の罪が立ち現われ、それらの罪によって彼の記憶は、「〈極悪の罪〉」との血縁関係を主張するもろもろの邪悪な物の怪の姿で混乱させられた」(XI, 88)のである。こうした場面は、「エゴティズム、すなわち胸中の蛇」における巨大な蛇に反応する小さな蛇を想起させる。

バートラムの「許されざる罪とは何だ」との問いにブランドは「それはおれ自身の胸の中に生じた罪だ」とまずその発生源を明らかにした後、罪の内容について説明する。ブランドによれば、それは「人間にたいする同胞意識と敬神の念を打ち負かし、それ自身の強大な要求のためにすべてのものを犠牲にする知力の罪」であり、「永劫の苦しみという償いにあたいする唯一の罪」である。そしてブランドはこうした罪を「もう一度犯さなければならないとすれば、自ら進んでその罪悪行為を招き入れるつもりぞ。ひるむことなく、おれはその報いを受け入れるのだ！」述べる。これは明らかにブランドの確信的な神への挑戦である。こうしたブランドの言葉にバートラムは「この男は狂っている」が、罪人である点では、「おれたち同様で、おそらくそれ以上のものではない」(XI, 90)と判断する。鈍感なバートラムにはブランドの意味することはまったくと言っていいくらい理解出来ない。彼は「あざ」のアミナダブあるいは「美の芸術家」のダンフォース同様にあまりにも世俗的な人間である。

バートラムの息子ジョウはその幼さにもかかわらず父親がかすかに感じはしたが結局否定してしまったものをはっきりとブランドの中に感じ取る。すなわち全身を震わせながらジョウは「見るのは恐いが、しかし目をそらすことの出来ないもの」(XI, 86)が男の顔にあることを知る。すべての人々が立ち去った後ブランドを1人残して眠るため父親の後について小屋に行く時、ブランドを振り返り見たジョウの目には涙が浮かぶ。彼はブランドを包み込んでいる「荒涼とした恐ろしい孤独」(XI, 98)を直感によって把握するのである。

駅馬車周施人、ジャイル、村医者 of 3人は、バートラムがひそかに否定したものをあからさまに否定する。彼等はブランドにこの中には「許されざる罪よりもはるかに探す価値のあるもの」(XI, 92-93)があると酒の入った黒いボトルを熱心にすすめる。アルコールによって敗残の身となった今も必死になって「人類の磁石の鎖」(XI, 99)を掴んで離そうとしない3人は、ある意味では、バートラム以上に世俗の塵にまみれた人間である。ブランドは、彼等の「低級卑俗な思考様式や感情」(XI, 93)を極度に蔑みながらも逆にそれと接することによって「実際に〈許

されざる罪)を見つけ出したのか、しかも自分自身の中に見つけ出したのかどうか」が疑わしくなる。そして「生命を、生命以上のものを費やして解いた問題全体が妄想のように見えた」(XI, 93)のである。3人の男の世俗性は、ブランドの知性を根底から揺さぶる。ブランドが3人を「肉体しか持たぬ野獣ども」となじると、3人を代表して村医者は「向うにいるジョウ同様にお前は〈許されざる罪〉など見つけ出しはしないのだ。お前は頭の狂った奴にすぎない」と言い返す。結論はパートラムと何ら変るところがない。ハンフレイ老人自身はただブランドに娘エステルを尋ねるだけの存在であり、若い村人達は、パートラムほどにもブランドの内面にたいして興味を抱くことはない。彼等にとってブランドは「粗末な衣服を着て、ほこりまみれの靴を履いた日焼けした旅人以外の何者でもない」(XI, 94)のである。したがって、ブランドは彼等に何の恐怖感を与えることもない。

ブランドが対面する人物の中で唯一「〈許されざる罪〉」と深いかわりを持つのが、のぞきからくりの旅廻り興行師のユダヤ人である。「お前のことをいま思い出した」と言うブランドに答えて、ユダヤ人は「陰気な笑を浮べて」「のぞきからくりの箱に入れると〈許されざる罪〉は重いものですな！ 大将、正直言って、日がな一日これがかついで一山越えてきたので肩が疲れてしもうた」と小声で言うのである。それに対してブランドは「静かにしろ！ でなければ、向うの炉の中へ入れ！」(XI, 96)ときびしい態度で応じる。ブランドとユダヤ人のこのやりとりは、ブランドは「〈許されざる罪〉について協議するために、毎夜、石灰窯の熱い炉から悪魔を呼び出していた」(XI, 89)という村人達の言い伝えが、単なる噂話ではなかったことを証明する。また、ブランドが窯の扉を開けた時のパートラムの「お願いだから、いまは、お前さんの悪魔を連れ出さないでくれ！」という要請に対するブランドの答えの一部である「おれは奴〔悪魔〕を置き去りにしてきた」(XI, 89)という言葉も真実味を帯びてくる。ユダヤ人に姿を変えた悪魔がやっとブランドに追いついて村に姿を現したのである。

ユダヤ人ののぞきからくりのショウが終るか終わらないうちに飼い主のいない、一匹の大きな老犬が、その短い尻尾をくわえようと突然回転し始める。そして「すさまじいうなり声を出し、歯をむき出し、吠え、噛みついたりすさまじいばかりの行為」(XI, 96)をやっても目的の尻尾をくわえられないと知ると、すっかり疲れはてて、おとなしくなる。この犬の自分の尻尾を追いかける行為とこれまでの自分自身の行為との間に「わずかな類似」(XI, 97)を認めたブランドは、「突然、彼自身の内的存在の状態を他の何よりも如実に表現している恐ろしい笑い声を発」(XI, 97)する。この笑い声によって彼をとりまく村人達の様子は一変する。

その瞬間から一座のそれまでの陽気さは終りとなった。彼等は度を失って立ちすくみ、その不吉な音が地平線あたりまで反響して、そこにある山が別の山にその音を轟きわたらせ、かくしてその恐怖が彼等の耳に長く響きわたるのではないかと恐れた。それから、互いに小声で、夜もふけたとか——月がほとんど沈んでしまったとか——8月の夜が冷え込んできたとか——言いかわしながら、歓迎されざる客人のもてなしの一切を、石灰焼職人と幼いジョウにまかせて急ぎ足で家路についた。(XI, 97)

この場面は「牧師の黒ヴェール」における礼拝後のフーパー牧師の黒ヴェールに対する信者達の

反応を想起させる。最初幼いジョウのみが感じていた、ブランドの笑い声をもたらす恐怖を、いまやすべての人間が共有することになったのである。ジョウと彼以外の者の反応の違いは前者がその「優しい心根」(XI, 98) ゆえに、「恐ろしい笑い声」の背後にひそむ、ブランドの「荒涼とした恐ろしい孤独」を直感し、涙するのに対して、後者は、恐怖のみを感じるという点である。しかし、実は、両者のこの違いは大きい。「優しい心根」の持主だということを考慮しても、ジョウの基本的精神はブランドのものに限りなく近い。旅に出た当初は、ブランドもジョウ同様の心根を持っていたことは、一人になって火の番をしながら当時の自分を想起する場面から十分に推測出来る。

彼 [ブランド] は思い出した、夜露が彼に降りかかったことを——暗い森が小声で彼に語りかけたことを——星々が彼に光を投げかけたことを——素朴で愛情に満ちた彼に、……。彼は思い出した、何という優しさ、何という人類にたいする愛と共感、そして人間の罪と悲しみにたいする何という憐みの気持を抱いて、のちに彼の生涯の靈感となったもろもろの観念を考察し始めたかということ…… (XI, 98)

子供と大人の違いはあるにせよ、ジョウのブランドにたいする心的態度はかつてのブランドの人間全体にたいするものと、基本的には何ら変ることがない。しかし、ブランドとパートラムの間には精神的傾向に関する限り共通性はきわめて希薄である。共通点は、石灰焼職人ということだけである。この職業が孤独な作業を強制するがゆえに「強烈に思索を促す職業」(XI, 85) であるにもかかわらず、パートラムは石灰焼以外のことには全く思考力を行使することはない。しかしブランドはこの職業が作り出す特殊な精神的環境の中で「その暗いもろもろの思念を赤熱の石灰窯の中に投じて、それらを溶解して一つの思想に作りあげた」(XI, 84) のである。環境それ自体は何ものも生み出しはしない。その思想の善悪は別にして、ブランドが思想を作りあげることが出来たのは彼自身が思索的人間であったからにほかならない。「イーサン・ブランド」では思索の人ブランドとそうでないパートラムの違いは容貌および行為・態度の特徴によって書き分けられている。

すでに部分的に指摘したようにパートラムは「粗野で鈍重な顔付をした男」であるが、ブランドは「肉付の薄いごつごつしたもの思いに沈んだ顔」(XI, 86) をした人物である。これは外的特徴を描写することによってその人物の内面を示すという作者ホーソンの常套的手法である。しかし、この作品でより重要なのは、炉の火に対する両者の反応の違いである。パートラムは、薪を投げ入れるために炉の鉄扉を開ける時必ず「その耐えられない灼熱の光から顔をそむけた」(XI, 85) 一方、ブランドは、パートラムが相手の顔をはっきりと見ようとして、炉の扉を開けた時、「前に進み出て、炉の灼熱する光を、そのとても光る目でじっと見詰めた」(XI, 86) のである。こうしたブランドの行為は一度だけではない。パートラムに代って薪を炉に投げ入れる時も彼は「前かがみになって、顔を赤く染める激しい赤熱の光をもものともせず、中空の火の獄舎をのぞき込」(XI, 89) む。石灰焼職人として生計を立てていた時もブランドはパートラムとは違って顔をそむけることなく、石灰窯の火を見詰めていたにちがいない。パートラムには無縁の見詰めるというブランドの行為は、まさに思索行為そのものである。しかし、パートラムをはじめとす

る村人達は、この見詰めるという行為——この作品においては、具体的には火を見詰めるという行為——を村の云い伝えに示されるように単に悪魔との対話の象徴行為としてしか理解しないのである。しかし、前述したごとく、見詰めるという行為すなわち思索行為と解するならば、ブランドのそうした行為こそ、もっとも、人間的な行為である。知恵の木の果実を神の言いつけにそむいて食し、善悪を知る能力を手にはしたが同時に死ぬべき運命をも与えられ、楽園から追放された人間は、手に入れた能力を行使して死すべき運命の中で生きて行くしか方法はない。蛇の誘惑があったにせよ、イヴが神の命に反して知恵の実を食したということは、イヴに蛇の誘惑を受け入れる下地としての好奇心があったからである。禁じられていたことを意志の薄弱さのために破り犯したという解釈はむしろ2次的、補足的なものである。ホーソーンは、人間が本質的特徴として持つこの強烈な好奇心を「ロウジャー・マルヴィンの埋葬」の主人公ルーベン・ボーンの中にも見出す。敗走兵であるルーベンは、義父となるべきロウジャーの再三再四の説得によって、ただ一人で森を抜け出るべくロウジャーの元をいったん離れるが、急速に失いつつある体力をも考慮せず、ただ「狂おしい疼くような好奇心」(X. 345)に強いられて引き返し、死を待つロウジャーの様子を根こぎにされた木の根に身をかくして観察するのである。ルーベンは悪辣な人間ではない。若いことのほか思い遣りのある優しい人間として描かれている。このようなルーベーンも好奇心に抗うことが出来ないのである。このことから人間にとって好奇心がいかに大きな働きをするかをホーソーンが明確に認識していたかが分るであろう。

ブランドの好奇心がいかに病的・異常に見えるとしても、それが人間の本質に根ざしている以上は、ただ非難して済ませるわけにはいかない。肉体がしばしば病いに冒されるごとく知的精神の核とも言うべき好奇心も病いに冒されるのである。肉体が最終的に死を迎えるごとく、知的精神もまた滅びを運命づけられている。滅びの運命の枠の中でしか人間は存在を許されていない。しかし、人間は人間が人間であることを、運命を素直に受け入れることによってではなく、運命を超越しようとすることによって証明しようとするのである。ここにこそ人間の悲劇の根元が存在する。そしてブランドの悲劇もここに始まる。

旅に出る前のブランドは夜毎石灰窯の火を見詰めて思索に没頭した。たしかに、彼の思索は「暗い思念」にもとづくものではあった。しかし、思索は必然的に内省を伴うものであるがゆえ、それは彼自身の心の闇を見詰める行為ともなる。そして、「亡霊の住む心」の中でホーソーンが指摘するように「すべての心の奥底には墓場と土牢があり」(IX, 306)、そこに「死者達やあるいは囚人達」が隠れているとすれば、心の闇は万人共通のものとなる。したがって「暗い思念」はブランド特有のものではなく、思索行為の必然的要素ということになろう。事実、「〈極悪の罪〉」「〈許されざる罪〉」が構想され育まれるのは「人間の腐敗した本性の領域内」(XI, 88)であると説明される。この場合の「腐敗した」という修飾語は、特定の人間の本性に限定的に使われているのではなく、「人間」そのものの本性が本来的に腐敗していることを示すため用いられている。ブランドに関する村人達の云い伝えによれば、「〈許されざる罪〉」を生み出すには協力者として「石灰窯の灼熱の炉から悪魔を呼び出す」(XI, 89)ことが必要であるが、これは、楽園での蛇の誘惑による墮落パタンの地上での再現と言えるものである。云い伝えが真実であるか否かはともかく、「〈許されざる罪〉」とは「神の無限の慈悲の領域を越える」(XI, 89)罪であるならば、その罪を「構想し育む」こと自体がすでに神への反逆であり、その罪を探し求めて世界を旅するこ

とは、神への単なる反抗・挑戦ではなくて、神の存在を越えんとする意志、神の座を奪い自らを神となす意志の表現である。しかし、絶対的存在としての神という認識のもとでは、絶対的存在を越えんとすること自体がすでに論理的矛盾である。ブランド自身がこのことをどの程度に認識していたかは定かではないが、彼はこの矛盾にあえて挑戦するのである。「〈許されざる罪〉」という「〈観念〉がはじめて現出した」夜が「不吉な夜」(XI, 84)として描写されようと、その「〈観念〉」をブランドは見過すことは出来ないのである。彼は徹底的に知の探求者である。しかし観念を弄ぶ人間、観念の遊戯に満足する人間ではない。それは彼が「思索的」であると同時に、石灰焼職人として身につけた実際の側面を持っていたからである。かくして、ブランドは思索によって作り上げた「思想」が指示するものの存在を自ら確認するために旅に出る。そしてこの確認の旅は18年間継続する。

旅の間のブランドの行為はひたすら他人の心の中に「〈許されざる罪〉」を探ることであった。そしてこの過程において、彼は「いかに汚されていようとも」「本来的に聖なる神殿 (XI, 98) としての人間の心を敬意の念をもって覗き見ることが出来なくなる。この時点で彼は「人間の同胞」ではなくなり、それゆえ、秘密を閉じ込めている心の扉を開ける「聖なる共感という鍵」(XI, 99) を手にする資格を失うのである。この状態にあるブランドをホーソーンは「知と情の均衡」(XI, 98-99) を失った者としてとらえる。「知」のみが異常に発達し、「情」の面は「萎びて一縮み一堅くなって一消滅した」(XI, 99) と説明する。かくして、ブランドは「人類の磁力の鎖」(XI, 99) から手を放すのである。こうなれば、他の人間は彼の探求のための単なる素材、自由自在に動かすことの出来る「操り人形」にすぎなくなる。かくして彼は人間から「悪魔」となる。(XI, 99)

「ああ、〈母なる大地よ〉」と彼は叫んだ。「あなたはもはやわたしの母ではない、この肉体は溶解してあなたの胸に帰ることは決してない。……さあ、恐るべき〈火〉の要素——これからのわたしの親しい友よ！ わたしを抱け、わたしがおまえを抱くように！」(XI, 100)

ブランドはこの言葉とともに石灰窯の頂上から火の中に身を投じる。しかしここでブランドを主人公とするドラマは終るのではない。ホーソーンは、バートラムその幼い息子ジョウに朝を迎えさせる。

早朝の日の光はすでに山々の頂に金色の光をふりそそいでいた。谷間はまだ影の中にあっただが、急速に近づいてくる明るい1日の濃厚な気配を感じて微笑んだ。村は……神の摂理の大きな掌の中で安らかに眠っていたかに見えた。(XI, 100-101)

この描写は、夕刻から真夜中にかけて展開するブランドのドラマと全く対照的である。ブランドは村の3人の著名人に対面する中で、自分が発見したとする「〈許されざる罪〉」が「妄想」ではないかと一瞬疑い、その疑いを否定すべく、「いや、それは妄想ではない。〈許されざる罪〉は存在するのだ！」(XI, 94) とつぶやく。しかし、そのことによってブランドの疑いが完全に消え去ったわけではない。「〈許されざる罪〉」の存在はたえず世俗との接触の中で揺れ動いている。

山々の頂きにふり注ぐ「金色の光」に象徴される朝は、ブランドのドラマそのものを一場の悪夢と見なすべく作用する。そしてとどめの一撃というべきものが、バートラムの「棒」の一撃である。

大理石はすっかり燃え尽きて、完全な、雪のように白い石灰になっていた。しかしその表面の、円の真中に——やはり雪のように白く、完全に石灰になった——人間の骸骨が……あった。その肋骨の中に——不思議なことに——人間の心臓の形をしたものがあった。(XI, 102)

この「心臓の形をしたもの」を含むブランドの「骸骨」をバートラムは「半ブッセル分」、石灰が増えたとして、それ目がけてふりあげた棒を落す。すると「イーサン・ブランドの遺骸はこなごなに砕けてしまった」(XI, 102)のである。そして、この描写が作品の結語となる。

世俗の最たるものとも言うべきバートラムの一撃に使用される「棒」は、彼の火掻き棒である。彼はそれを使って「計り知れないほどの量の燃え木」(“the immense brands”)(XI, 85)をかきまわすのである。“immense brands”(イタリック筆者)をかき回すことの出来る棒にとって Brand の遺骸を打ち砕くことはとても易しいことである。たしかにバートラムの眠りの中にもブランドの「恐ろしい大きな笑い声」は響いてきたけれども、そして鈍感で粗野な彼も、ブランドに恐怖を感じはしたけれども、それはすべて夜を背景にしてのことであった。朝を迎えた時にはブランドはすでに白骨として窯の中にあっただが、バートラムはブランドの心臓が石灰化して残っている意味も理解しないしまた追求しようともせず、石灰が増えたことを単純に喜ぶだけである。とすればバートラムの棒の一撃によってブランドの遺骸が打ち砕かれることの意味は、単に現実が「妄想」・悪夢に勝利をおさめたという単純なものではなくなる。

文中では明確に「知」(“mind”)と「情」(“heart”)の均衡のくずれは「巨大な知的側面の発達」(XI, 98)がもたらすと説明されるが、それ以前に思索によって生じた「〈許されざる罪〉」という「〈観念〉」が存在する。そしてこの「〈観念〉」が「教育手段」(XI, 99)として機能するのである。そしてこの「〈観念〉」は、すでに述べたようにブランドの「暗い思念」から作りあげられたものである。したがって、ここで問題になるのは第一原因としての「暗い思念」である。この「暗い思念」がどこから生じたのかは文中で一切説明されることはない。それが説明されないのはその必要がないからではなく、それこそが真の意味での第一原因であるゆえに説明出来ないがためである。この作品では、ブランドのみが持っているかに思える「暗い思念」こそは、もっとも人間的な要素である。この「暗い思念」が、思索の結果、「〈許されざる罪〉」を生じさせたとなれば、人間の思索行為そのものが罪と言えよう。ここに敬神と思索の基本的な矛盾がある。最も厳密な思索行為には、前提条件はあってはならない。しかしキリスト教世界にあっては、神の存在は絶対の前提である。そうした神の無限絶対性を「神の無限の慈悲」を越える「〈許されざる罪〉」を考え出すことによって否定するブランドの敗北は初めから自明のことである。越えられる絶対的存在などは言葉の矛盾以外のなにもものでもない。しかし、ブランドはあえてこの矛盾を犯そうとするのである。ブランドの行為はまさに神託を回避しようとするオイディプスのそれに比較し得るものである。それゆえ、「〈許されざる罪〉」は頭と心の完全な分離の結果である。したがって人生の問題にたいする一つの解決法はひとえに頭と心のバランスをとることにあるということは何

らかなことである¹⁾とドナルド・A・リンジが言うほどには事は単純ではない。リンジの意見ではブランドの「暗い思念」はまったく無視されているのであるから、その解決法はまったくの空理空論にすぎない。

結末部のバートラムの言葉「半ブッセル分」石灰が多くなったという部分に関して、テレンス・マーティンは「イーサン・ブランドの遺骸は半ブッセル分、バートラムの福利に貢献することになる。半ブッセル分、イーサン・ブランドは、軽蔑の対象である人間の世俗の目的に奉仕するのである²⁾」と解する。たしかに彼の言うように「無学で粗野な人間」が「最後に一種のアンティクライマックス的な勝利をおさめる³⁾」ように見えはするが、それはあくまでこの作品のテーマを世俗と超俗の対立と解する時のみ成立する見解である。マーティンがイーサン・ブランドの「究極の目的は常に彼の〈創造者〉を乗り越えることである⁴⁾」と言う時、ブランドの目的を正確にとらえている。しかしなぜブランドがそういう目的を持つに至ったのか、偶然なのか必然なのかについての説明はしない。それゆえ、ブランドが「神を越えようと決意する瞬間から、結局は、神の創造物から作られている人間の磁力の鎖に占める自分の位置を失うことになる⁵⁾」という当然すぎる説明しかなし得ないのである。問題はなぜブランドがそうした決意をするのかということである。

シェアロン・カメロンはこの物語りは「単純な非情さについての物語りではなく、心の在りか——外部か内部か——の不確実性を示唆する物語りである⁶⁾」とする。しかし、その前提として「罪と心」は「等価物」であり「〈許されざる罪〉の探索」はすなわち「外部化され抽象化された人間の心の探索」であり、「ブランドの中心願望」は「内部世界と外部世界との相違をなくすことである」という考えである。しかし、この前提は「〈許されざる罪〉」に関する文中の説明そのものを軽視することによってしか成立しない。

ジョン・コールドウェル・スタップズはブランドの変化（この変化はブランドの回想として描写される）に注目して、「最初は、彼の動機は賞讃すべきものであった⁷⁾」と判断するが、この考えも「暗い思念」を無視してはじめて成立するものである。

ウィリアム・ブッシュ・スタインはブランドをホーソーンの描くファウストの一人として見て、「神が慈悲を与えることが出来ない唯一の罪⁸⁾」とは「哲学上の至高知と同じ物」であると⁹⁾する。そして、「最高の罪を見つけ出すという特権と引き換えにブランドが悪魔に魂を売りわたした⁹⁾」ことは状況的に判断出来る¹⁰⁾と考える。また、ブランドの「この世の悪の性質について」の「好奇心」は「過度な」ものではあるが、「悪」は「人間の運命の避け難い一部として理解されるべきである」と主張する¹⁰⁾。しかし、ブランドの「悪についての好奇心」が「過度な」ものであるという判断の裏には「適度な」好奇心というものが想定されているはずで、そういうことであれば、ブランドの物語りは節度についての物語りと解釈出来ぬでもない。しかし、ホーソーンの描く人物の好奇心は「狂おしい疼くような好奇心」として説明されるようなものである。またこの作品においては、「悪」は単に「人間の運命の避け難い一部」として、提示されているわけでもないのである。ブランドは明らかに悪の魅力に憑れた人間として登場している。リチャード・ハーター・フォウグルが言うようにブランドが「彼のまわりの並の罪人よりもしばしば賞讃に値する¹¹⁾」のは自らの判断によって行動する人間であるからである。ブランドの持つ魅力は、人間のとりわけ自分自身の心の闇を認識し、その闇からの声に聞き入り、その声の命じるままに行動し、結果

のすべてをわが身に引き受け、しかも結果としての自己の敗北と破滅を、さらに言えば、そうした自己の位置を神と人間との関係の中であくまで明晰に把握しようとする姿勢にある。「〈許されざる罪〉」が他人の心の中にはなく自己の心の中にあったという発見は、その罪自体の具体的存在の発見ではなく、贖罪不可能な罪という観念の発見であることを意味する。そして、こうした発見そのものが、神の無限絶対性を否定すること、すなわち不可能にあえて挑戦する行為そのものなのである。ブランドの敗北と破滅ははじめから予想されたものである。しかし彼の抱える心の闇は、彼にたえず挑戦を囁く。見詰めること・思索すること、これは知的存在としての人間のいわば宿命である。そしてこの宿命が悲劇を生み出す。しかし、ホーソーンがバートラムよりもブランドの方により人間的魅力を感じていたことは疑いようもない。ブランドの行為が自分の短い尻尾を追いかける犬の滑稽な行為に似ていたとしてもそれは「かすかな類似」にすぎない。しかし、その「かすかな類似」をもブランドは敏感にとらえることが出来るのである。とすれば、ブランドの行為は、その中にいかに滑稽さを含んでいようとも、それをはるかにしのぐ悲劇性を示すドラマを構成していると言えるであろう。そしてこの悲劇性が、我々にブランドを単純に非難することをためらわせるのである。

注

作品からの引用はすべて Centenary Edition を使用し、巻数およびページ数のみを示す。

- 1) Donald A. Ringe, "Hawthorne's Psychology of the Head and Heart," *PMLA*, 65 (1950), 120.
- 2) Terence Martin, *Nathaniel Hawthorne* (Boston: Twayne Publishers, 1983), p. 98.
- 3) *Ibid.*, p. 97.
- 4) *Ibid.*, p. 95.
- 5) *Ibid.*, p. 96.
- 6) Sharon Cameron, *The Corporeal Self: Allegories of the Body in Melville and Hawthorne* (New York: Columbia University Press, 1991), p. 196.
- 7) John Calwell Stubbs, *The Pursuit of Form: a Study of Hawthorne and the Romance* (Chicago: University of Illinois Press, 1970), p. 93.
- 8) William Bysshe Stein, *Hawthorne's Faust: A Study of the Devil Archetype* (Archon Books, 1968), p. 97.
- 9) *Ibid.*, p. 98.
- 10) *Ibid.*
- 11) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (Norman: University of Oklahoma, Press, 1965), p. 55.